



TITLE:

田村實造教授の訃

AUTHOR(S):

村上, 嘉實

---

CITATION:

村上, 嘉實. 田村實造教授の訃. 東洋史研究 1999, 58(1): 170-170

ISSUE DATE:

1999-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155236>

RIGHT:

# 叢報

## 田村實造教授の訃

京大・文學部草創期の教授がまだ多く御健在のころ、田村實造先生はその業を受け、自ら教授となつて、東洋史研究會の副會長を十八年間もつとめたが、平成十一年二月二十四日不歸の客となられた。享年九十六歳であつた。

先生は明治三十七年山口縣南陽町に生れ、山口縣立德山中學校、第七高等學校造士館を経て、昭和四年京都帝國大學文學部史學科（東洋史學）を卒業、同大學院に進み、六年滿蒙史研究のため北京に留學し、一五年京大助教、二二年文學博士の學位を得て教授となり、二九年「慶陵の研究」で朝日文化賞を受賞し、又日本學士院恩賜賞を受賞した。三二年國際東洋學者會議（西獨）に出席し、三三年京大文學部長を併任、四〇年ボン大學に出講した。その間に種々の大學行政にも參與し、四一年文學部羽田會館（內陸アジア研究所）主事を委嘱、四三年停年により退官、京都大學名譽教授の稱號を受け、時に『田村博士頌壽

東洋史論叢』が出版された。四九年勳二等瑞寶章を受け、退官後も京都女子大學教授並びに學長に迎えられ、著述にも従つた。

先生のライフワークは『慶陵』（一・二）

で、昭和四一年小林行雄氏ら隊員を率いて內蒙古ワール・イン・マンハ（慶雲山）の遼王

墓を調査し、壁畫（人物・四季山水）・彫飾・陶磁・佛塔など、歴史・考古・美術史上貴重な研究を達成した。調査は困難を極め、シラムレン河の濁流と鬪い、ノモンハン激戦の脱走兵らによる危険を身を感じつつ、大方の成功をおさめて歸國した。いざ出版となると、

戰中戰後にかかり、つねに原稿を枕許に置いて守り、二〇年の東京大空襲で圖版全部と寫眞原板の大半を焼失し、一時絶望視されたが、二八・二九年にやっと刊行にこぎつけた。後に一般研究者のために『慶陵の壁畫』を出版し、又隊員の存命者が少なくなるのを歎き、平成六年『慶陵調査紀行』を著わした。

次に『中國征服王朝の研究』上中下は遠・金・元の歴史と文化を取扱い、多年の研究の集成で、文字の研究も含まれている。先生の

アジア史觀では、北アジア史（遊牧國家型と征服王朝型）は、中國史とは別個の歴史世界を形成する。征服王朝を、從來のように中國

史の一環として見ることに同意しない。右の中巻には、ウィットフォゲルの中國征服王朝理論に對する紹介と批評が載っている。同氏が中國社會史を、文化變容論を應用して、

典型的中國社會と、征服王朝的社會と二つのカテゴリーに類別し、征服王朝を潛入王朝（五胡・北魏）と對比しているのに對し、先生は征服王朝の基本的性格は牧畜・農業の兩社會を包含し、牧畜が武力に支えられて優位を示すが、征服王朝となるためには牧畜體制を放棄制限しなければならず、因つて武力が宙に浮き、瓦解に導くのであると。又征服王朝

は遊牧國家と對比すべしと言う。そのほか主要著書には、皇明實錄抄『明代滿蒙史料』十八冊、『元史語彙集成』三冊、『中國史上民族移動期』、『アジア史を考える』等がある。

先生は田村家の墓地並びに舊居がある香川縣託開町の風物を愛し、しばしば彼の地に滞在し、昨年一月そこで病氣で倒れ、本宅に近い兵庫縣川西市の病院に移り、心不全にて永眠された。先生は學生時代から親鸞の思想に傾倒し、自ら『歎異抄を読む』（NHKブックス）を著わし、臨終が近づくまで家族の者に歎異抄を讀んでもらつて、それを聞きつつ大往生を遂げられた。（村上嘉實）